

「知識＝教養」ではないことを肝に銘じておきたい

先の記事「『知識』という語彙が持つ もう一つの深い意味（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（VI）、2010.4.11.参照）」で「知識」というものを考える時、以前から次のようなことを思い倦ねていた。

オウム事件の教団幹部には、最高学府、しかも全国的に著名な大学の卒業生、在校生がいた。

彼らは専門的知識・理論を含めてたくさんの知識を学んでいるという点では世間的にはエリートのはずが、なぜ実行部隊として悲惨な犯罪に走ったのかということが、ずっと疑問に思っていた。

つい最近の新聞書評欄で書籍「オウムを生きて～元信者たちの地下鉄サリン事件から15年～」の出版を知り、自分の疑問の答えの何かヒントがあるかなと思い、早速購読した。

本書は、事件発生から3年目に事件被害者手記集の出版を手がけた編集者が、事件を風化させないために今回は元信者たちの手記を纏めたものであった。

編者は、元信者たちへの「インタビューをもとにまとめた原稿を本人にチェックしてもらい、変更、削除、加筆した上で完成とした」と云うだけに、編者としての教団や事件へのコメントは一切なく、元信者の告白の手記集といえる書であった。

スピリチュアル（「自己の存在意味」という、答えのない自らへの問いかけ）な側面から、宗教というものに出会い、その教義に疑問を抱くことさえ、また、家族、友人等の脱会への助言に惑うことさえ、自らの修練が足りない故と自己を攻める修行の日々、そして脱会への心境変化等、この間の心情的プロセスを垣間見ることができる書であった。

人は誰もがスピリチュアルな側面を抱えながら生きているだけに、編者は「はじめに」の章で、「『こんなおかしなやつらのことは、いっさい理解できない』といきどおる方も、『ある部分で、自分と通じるものがある』とを感じる方もいるだろう。それはどちらでもかまわない。いずれにしろ、すべてを『他人事』にしてしまわないことが、事件を風化させない一番の方法かもしれないと、私は思ってる。」と記している。

大人や教育関係者は、「知識＝教養」ではなく「教養とは人の心が解る心」であることを肝に銘じておきたいものである。